

おもしろ にいがた学

新潟方言・郷土史研究家 大田 朋子

プロフィール

新潟市出身（出生地は柏崎市）
東京で大学・研究室生活を経てリターン
雑誌記者、コピーライター、ライター、インタビュアーの仕事をするうちに、方言や習俗、歴史に魅せられ、研究、普及につとめる
心理学・新潟学等講師、経営学修士（MBA）
著書「独断大田流にいがた弁講座」（新潟日報事業社）
「おもしろ えちご塾」（恒文社）等

「左のはなし」

昨今、世間では言っではいけない、書いてもいけない、いわゆる禁止用語・差別用語が増えており、何気なく使っていたことばが、後で差別・禁止用語と判明し、うわっ！となることももしかかあります。

慣用句はそのオンパレード。例えば、県内催事が盛況ぶりの押し合いへし合い状態に、「将棋倒しになりますのでご注意ください」（この位盛況だといひね）、という場内警備の発言は、将棋のイメージが悪くなるからダメ。「北陸道で玉突き事故！」（有っては困る）も、ハスラー怒るからダメ。というようにふと口にしたことばが、「おや、どうしょば」になることがあるため日頃から注意が必要です。

「犬死」は愛犬家怒る、「猫も杓子も」は愛猫家怒る、道具屋もおもしろくないはずです。「豚に真珠」は豚の人権（？）どうなる？！とその筋の団体怒る。宝石屋も「手前どもにはブタに付ける真珠などございませぬ」と感慙に怒ります。「メジロ押し」だって、愛鳥家の逆鱗に触れ禁止用語になるのも、もはや時間の問題でしょう。

ああ、これでは平成のことば狩りです。こうなると特に方言や古語は注意が必要で、この原稿も私はこれまで以上に細心の注意を払って書く必要があります。

そんな中、今まで禁止用語だと封印してきた新潟弁がありました。そのモンダイの方言とは「左ぎっちょ」。左利きのことばです。うわあ、とうとう書いてしまいました！「ぎっちょ」なる言葉を書いたからには、糾弾・紛糾・暴動・デモ行進、責任者出て来い！のおおごとに発展！？と思いきや、心配ご無用。実はこの「ぎっちょ」とは、「器用」が転じたことば、つまり「左ぎっちょ」は「左器用」のことばで、むしろ「左利きは器用だね！」という誉めことばであったのです。

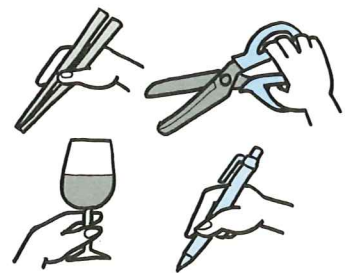
現に不器用な人を「ぶぎっちょ」といいますが、

きっちょが、新潟弁では「ぎっちょ」になっただけの話ですから、そう目くじらたてることもありますまい。

今でこそ「個性が大切、左利きを無理に直すことはありません」というお説もあり、堂々と左ぎっちょでお箸を持つ人も見受けられます。しかしながら、古くは右の「馬手（めて）」、左の「弓手（ゆんで）」と称し、また、「お箸は右手、お椀は左手」、「廊下は走らず右側通行！」と子供のころから躰られ、私たちは右と左の役柄を明確に区別してきました。ですから私たちにとって右利きは当たり前のことであり、右利き文化の日本の生活のなかでは、左利きは特異なものであったと思われる。着物も「左前」では縁起悪いし、会社の経営が「左前」になってもこれまた塩梅悪いように、「左」は日常とは明らかに異なる状態を指したのも事実です。

「左利きに天才が多い」「人間の右脳はイメージーションや芸術力を司る。それを支配するのは左の手」という説もありますから、「左ぎっちょ」を差別用語として「言っちゃいけない・書いちゃダメ」と我慢してはなりません。むしろ郷土のことばとして使用しても良いはずですよ。

あら、私ですか？お箸もペンもじゃんけんも「右」です。右脳活性化のため、よせばいいのに左を使ってみました。どうもうまくいきません。やはり私、左は苦手でありました。



（なお、ぎっちょは、関東の一部地域でもみられる方言や江戸弁との説もありますが、その普及具合と語感からあえて新潟の方言ととらえています）